

リーディング活動に視点を当てた英語科における基礎・基本

- 英語運用能力のための表現形式習得を目指して -

英語科研究会議

研修員 鬼頭 洋司（川崎市立川中島中学校） 執行 明美（川崎市立南河原中学校）

吉野 敬子（川崎市立宮前平中学校） 平谷 泰美（川崎市立犬蔵中学校）

研修指導主事 小池 優一

主題設定の理由

学習指導要領の外国語（英語）科における改善の具体的事項の一つとして「音声によるコミュニケーション能力をいっそう重視する」ことが挙げられている。特に中学校段階では、「聞くこと」「話すこと」の音声によるコミュニケーション能力を重視することを示している。これらに「読む」「書く」活動を加えての4技能の言語活動の有機的な関連を図った指導を展開することも記述されている。

現在、中学校英語科の授業形態は、その重点が訳読中心のものから言語活動を多く取り入れたものになってきているが、学習指導要領の目標を重視してのことか、「聞く」「話す」活動に多くの時間が費やされる傾向にある。

スキル統合指導や4技能の統合指導は、4つの技能をバラバラに指導するのではなく、全てのスキルをまとめて指導する考え方である。

特に学習の初期の段階では「聞く」「話す」活動を重視しながらも、段階的に2学年、3学年においてはリスニングやスピーキングのみに焦点化せず、オーラルな活動に加えて「読むこと」の活動を取り入れている。このことにより、他の活動を通して同じ学習内容を音声での学習内容の確認をしたり、思考をフィードバックさせたりして、あらゆる力が統合的に伸ばせるように、スキル統合という観点で授業の組替を提案したい。上記のように様々なアプローチによる活動を仕組むことによって、生徒の学習やコミュニケーションに対する関心・意欲を喚起する授業展開・工夫を引き出す授業創りが可能になると考える。

外国語学習で必要なこととして言語のルールや語彙、表現が頭の中からすぐ取り出せるようなところまで自動化されているか否かがあり、これはコミュニケーション能力そのものである。自動化するには繰り返し練習しなければならない。これは、暗記することとは異なり、話し手・聞き手にとって有意義な状況をつくり、授業の中で繰り返し練習することで、コミュニケーション能力の獲得に繋がっていくと考える。

本研究会議では、研究を始めるにあたって、研修員の所属する学校の生徒の実態を話し合った。その中で、「教科書が、すらすら読める生徒は、コミュニケーション活動でもリードしている傾向がある。」という結果を受けて、生徒にとって身近なテキストをベースにしながら、さらに異なるリーディング活動を組み合わせて行うことが、英語の基礎・基本を身に付け、コミュニケーション能力を高める一つの要素となると考えた。そこで、繰り返しを意識させないような工夫をしながら活動例を考え実践することでの主題設定をした。

研究の内容

学習指導要領解説編では、「読むこと」についての言語活動として、以下の4項目の指導事項が示されている。

- ・文字や符号を識別し，正しく読むこと。
- ・書かれた内容を考えながら黙読したり，その内容が表現されるように音読すること。
- ・物語や説明文などのあらすじや大切な部分を読み取ること。
- ・伝言や手紙などから書き手の意向を理解し，適切に応じること。

これらの指導内容として，大きく2つが挙げられる。1つ目は，書かれた文字，フレーズ，そして文を認識し，正しく読ませることであり，(逐語読み Word-by-word reading, フレーズ読み Phrase Reading)これには，「音読」と「黙読」とが挙げられる。2つ目としては，書かれた内容を推察したり，理解しながら読解させることである。(パラグラフリーディング Paragraph reading)

本研究会議では，いくつかの有効だと考えられるリーディング活動をリストに挙げ，それらを継続的に適宜実施することで，「聞く」「話す」活動時にもアウトプット（生徒自らの発話等のパフォーマンス）を増やすことができ，繰り返しの活動を通して，英語表現を内在化することができると考えた。第2言語習得研究において，決まった表現や与えられた英文を内在化するだけでは，自己表現やコミュニケーション能力に発展しないと考える考えと，次第に内在化された英文，表現が統合されて言語習得が進むとする考え方がある。これら2つの「読むことを中心とした活動」を授業に取り入れてみた。

1 音読活動のバリエーション

リーディング活動として，Chorus reading（一斉読み），Buzz reading（生徒自身のペース読み），Individual reading（個人読み）（黙読，音読）が一般的である。Chorus readingでは，CDなど教育機器を使用したり，教員またはALTの後を追っての一文読みやフレーズ（意味のまとまり）ごとに文の始めから，または後ろから1フレーズごと加えながら全文を読み進む手法などが行われている。これらの活動は教員側の準備もそれほど必要なく実施でき，繰り返し行うことで技能習得に繋がる。ただし，生徒側の活動への興味・関心や集中力を考えて，いくつかの活動のバリエーションをもたせることで，実際に繰り返して学習していることを意識させずに，より効果を上げることができるのではないかと考える。

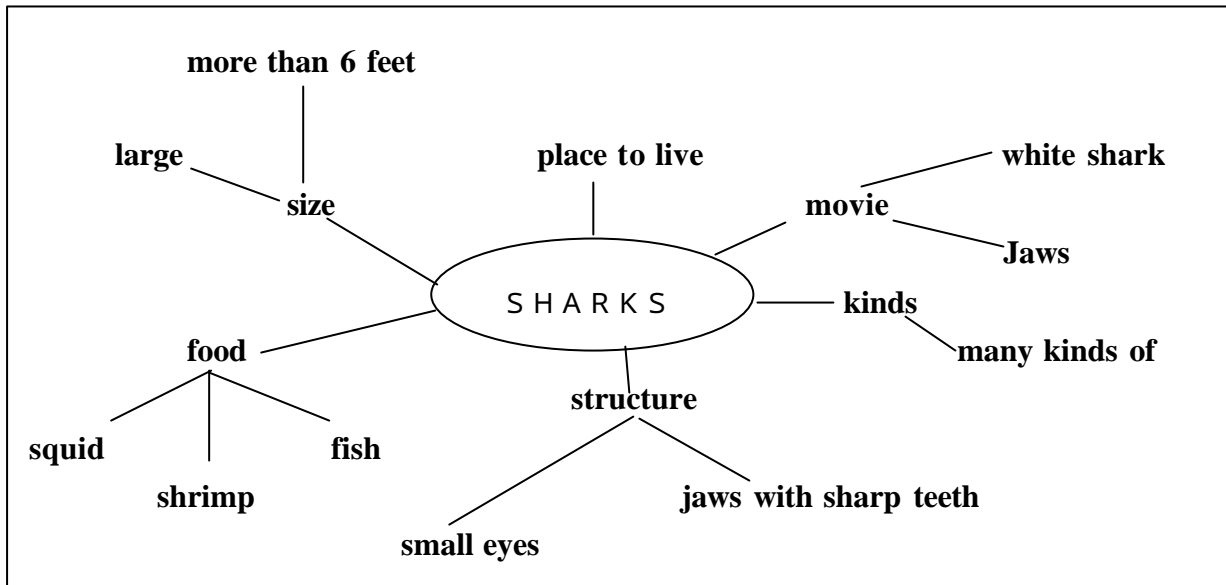
以下にそれらを挙げる。

- (1) 列音読（教室の列ごとに一人が1文ないしは1パラグラフごと読むリレー読み）
- (2) Reading andlookup（読む時はテキストを見ないでの読み）
- (3) チェーン音読（グループないしは，全員で1文または数文ずつの読み）
- (4) ペア音読（2人での交代読み）
- (5) シンクロ音読（同時読み），Overlapping / Dubbing（CDなどの後についての同時読み）
- (6) Shadowing（読み手の後をすぐ追っての読み）
- (7) Emotional Reading（読み手の人物を決めたり，読んでいる時，状況を変えての読み）
- (8) Chunk/ Phrase Reading（意味のまとまりフレーズごとにポーズを意識しての読み）
- (9) 1 Minute Reading / Rapid Reading（あらかじめ決められた時間内での速読）
- (10) Jigsaw/MaskingReading（テキストの本文の一部をいくつかの文房具等で隠しての読み）

2 セマンティック・マッピング

リーディング活動を行う際、内容を理解し確認する方法としてマッピング（情報内容をウェブで表す）を試みた。ただ「読む」だけではなく、読み取ろうとするメッセージを生徒が、自分なりにメモを取りながら読み進めることで、内容の整理ができ、より読み深めることができると考えた。

図 1：Sharks（生徒は、サメについての英文情報をマッピングで以下のようにまとめる）



研究のまとめ

国際化の進展に伴い、人と人が直接的に「聞いたり」「話したり」のコミュニケーションやパフォーマンスがさらに多く行われ必要とされる中で、音声だけでなく E-mail などの文字を介としたコミュニケーションの機会は今後さらに増えることが考えられる。「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」能力も大きな役割を担ってくる。本研究会議では、「読むこと」に視点を当てたが、今後「書くこと」の活動にも関連させていくことが、統合的な力を育成することへ繋がると考える。

別の視点として、特に「読むこと」の活動は、教室での活動だけでなく、家庭学習への橋渡しにも繋がられ、自立した学習者を育成することにもなりうる。

1 研究の成果

生徒の英語運用能力やコミュニケーションストラテジーがどの程度高まったかの数値的なデータは出せないが、生徒の変容が以下のように見られるようになった。

- ・音読練習により、英語で書かれたもの（教科書など）を自然に声に出して読むようになった。
- ・声に出して積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が見られるようになった。
- ・生徒自身の到達すべき学習目標が明確になり、目標への努力をする姿勢が見られるようになった。

2 今後の課題

(1) リーディングにおけるスキーマの役割

学習指導要領では、表現するための基本的な表現形式の習得(4技能の習得 = Skills)、コミュ

ニケーションへの関心・意欲・態度とともに コミュニケーションを図るためのある一定の話題についての情報の獲得（評価では、言語に対する知識、理解）を挙げている。教員のインプットや生徒同士による言語活動を通してリーディング活動を支える多方面の話題や情報を知覚させていくことで、初めて読んだ内容をより推察し、理解させることができると考える。

（２）Scanning と Skimming

生活の中でのリーディングには、きわめて重要な情報を１語１句正確に読みとること、たくさんの情報から要点を限られた時間で読み取ることが挙げられる。

高度情報化社会がすすむ中、インターネットなどに象徴されるように、多量の英語情報の中から、自分の必要に合った情報を短時間に取捨選択するために、今までと違った読み、形態、例えば、Scanning（情報検索読み）や Skimming（拾い読み）の指導方法等も開発していきたいと考える。

（３）一斉授業での習熟度別のリーディング教材

一斉授業を行うことが一般的な状況で、リーディング活動においても習熟度について配慮した教材を作成していくことで、より生徒の達成目標を明らかにすることができるであろう。

（４）外国語（英語）科の授業数

教育課程の実施とともに外国語（英語）科は、必修教科となった。同時に年間授業時数は１０５時間と定められた。生徒に身に付けさせるべき基礎・基本やコミュニケーション能力の育成を目指した指導・評価の工夫、改善が取り組まれている状況の下、授業時数の確保に努めると同時に、限られた時間、期間でのより効果のあるシラバス、授業方法等の工夫を絶えず加えていくことは必要なことである。

最後に、本研究を進めるにあたり、指導助言をいただいた先生方並びに研究をご支援くださった研修員所属校の校長先生並びに教職員の皆様に心からお礼を申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|---|-------|
| 小池生夫監修『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』研究者 | 1994年 |
| 鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書 | 1999年 |
| 静哲人『英語授業の大技・小技』研究社出版 | 1999年 |
| 『中学校学習指導要領の展開 外国語（英語）科編』 明治図書 | 2001年 |
| 國弘正雄他『英会話・ぜったい音読』講談社 | 2001年 |
| 國弘正雄『英語のはなしかた』たちばな出版 | 2002年 |
| 「英語科教育の基礎と実践～新しい英語教員をめざして」JACET 教育問題研究会編 | 2002年 |
| 「AERA」4月号 朝日新聞社 | 2002年 |
| 「Effects of Reading Aloud in Junior High School Classes」神奈川県立総合教育センター発表 | 2002年 |

【指導・助言者】

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 川崎市立中学校教育研究会英語科部会長（川崎市立南加瀬中学校校長） | 須山 弘一 |
| 川崎市教育委員会学校教育部指導主事 | 鈴木 浩之 |